

〈論文〉

月光仮面は誰でしよう？

——テレビ映画『月光仮面』論もしくは正義論

私には他人の責任そのものに責任がある。(レヴィナス『倫理と無限』)

高橋 康 雄

1 「正義」 いやはや……

見えすえた思わせぶりの正義顔が堂々と歩いている。堂々とすればすべからく「正々堂々」に見えてくるからだ。こんな光景を才子たちは本音と建前の使い分けと物分かりよさそうに納得してしまい、この怪しげな紳士と同じ空間を共有することをこれまた思わせぶりの寛容と心得ちがいし、与同罪(手をかす加担の罪)になることなど恥じようもしない。正義の首謀者も加担者たる才子たちも無責任ながら、やっていることと言えば、なんのこともない「偽の建前」に正義の運動のヴェールをかけ、人眼をくらま

しているだけのこと。才子たちは「生活」(たつき)のためならそのような「偽の正義」に加担しても何も罪にならないとお思いなのだろう。なかんづく、ジャーナリストと称している人たちがほど右顧左べん、日和見主義はない。舌の根も乾かないうちに見解の変更、相手の乗り換えはお茶のこさいさいである。いかなる愚鈍なる正義も誰かは支持してくれるのである。それも持ちつ持たれつの「たつき」のためさ！ このいい加減ぶりこそぬるま湯好きなメディアの湯かげん。一回一回、責任をとっていけばメディアの存在基盤をゆるがすことになるのでいい加減が手ごろなのさ。このもろい土壤にこそ「正義」の繁栄の肥沃な領域が許されてい

るのだ。

組織的罪、集团的罪状はいつだって「真の真実」や「唯一の正義」の看板にいとおしく包みこまれて、後ろめたさなどおくびにも出さず、真実・正義の表看板を目印に世間をわがもの顔で闊歩しているものだ。束の間、持ちつ持たれつの才子には「真実に見える」だけでも都合なのだ。誰も咎めはしないという安心感が支えだ。真実に見える間は誰からも追及されるおそれはないとたかをくくっているからだ。これにとどめをさす論者はきわめて少数派だというこの風土の知的水準！ リクルート事件だって捕まったら損よ、ぐらいで徹底追及はしない習いと決まっている。身から出た錆はお互いにかばい合う。こんなありさまだから骨のズイまで楽観的な五流、六流の埒外の提灯持ちたちがわっせわっせと神輿をかついで、まさにどこにもない「飛びきりの正義」を演出したつもりでいる。お流れ・おこぼれを頂戴したがる乞食根性だって大いに役立つという教育五流の国家。精神の力は六流の風土。ここには二流も三流もない。自立性も自尊心もない、寄らば大樹の陰とばかりに、無という存在が人の禪で相撲をとって空無の権威の「何か」の「おこぼれ」にあずかろうとしているだけではないか。おそらく、将来、国家的規模の官僚システムの国家的正義の領野を牛耳っている部門にキレツが入り、初めは弥縫策

でごまかし、やがては天下に醜態をさらした末、大あわてする時が必ず来る、と予告してもよい。そんな崩れやすい土質の上に「正義」の建て物は立っている。

なぜこんな書き出しから始めなければならないのか。わたしには近頃の正義はその都度発揮される機敏なものではなく、正義というイメージに執着するあまり実は「大同団結」という「赤信号」で渡ればこわくない」方式の集团的な荒っぽい行動でなにごとにも腕力で解決し、正義の本体などどこへやらのありさまで、まさに膠着した、言説だけに形骸化してしまっていると思わざるをえないからである。否、言説だけといっても「やらざるぶつたり」で権力も物もせしめていく横暴さを持っているから、油断のならない連中である。こんなことだからますます本来の正義が出番を失っていく。本来の正義とは、大きな正義をまえに気圧されて、もごもごしたり、とっさに小さくつぶやいたりするなんとも歯がゆい類の言説のことを言うことは申すまでもない。少しも堂々としていないし、勇気があるとも見えない生理のようなものである。挙げ句は、ごり押しの中はいざ知らず、目の前で「正義」にしてやられたお人よしたちは、茫然自失し、遠ざかる本来の正義の影に向かつて「正義やーい」と叫んでいる始末である。何というイロニー——。

さて、「正義の味方になるためには、どうして仮面をつけたり、変装したりしなければならぬのだろうか」（「月光仮面」と記したのは寺山修司である。寺山の分析は第二次大戦を境にして「この倫理——正義の素顔は、悪の素顔へと倒錯していき、正義は居場所を失い、姿をくらまさなければならなくなった」というところどころに落ち着く。ここで寺山は「大きな声ではいえないが……」としながら「怪人二十面相と明智小五郎とは同一人物であり、月光仮面と小児誘拐魔とは同一人物なのであった」と大胆な仮説を提示している。確かに戦前の皇国主義による一極に同化するファシズムは、隣人すべてを「右ならえ」へと類似化させ、お互いがお互いの監視の眼になっていくことよってひとびとはみずから播いた種によってつねに居丈高になり、その一方反動のせいか内心は戦々恐々として身をすくめ、本当のことなど通用しないとわかると、ウソで固めた正義を後生大事にするようになってしまった。鋳型にはまったような通り一遍の人間になってしまった。そのうえ、不退転の決意などと情念を上塗りしてファナティックぶりに拍車をかけていく。正義なんて振りかざす連中はいつもこの体たらくだ。自分が言い出して恰好つけておいて、その自縄自縛に自分が一番もがき、苦しむときまっている。その苦渋すら食い散らす獐猛さにいたってはピラニアも真つ青というところだ。それどころかとうの昔に本来的などころに引き返す度胸などピラニアにでもくれてやったらしい。

一枚看板とか、この人は偉いとか、鉄桶の団結とかいったもつともらしい提唱は自分の中身の空虚さを、インチキ性を隠蔽する戦法にしかすぎず、内実は大衆の生命収縮の装置でしかないことには大抵のひとは無自覚だ。無自覚だから誰もが小粒になり、そのくせもつともらしく振る舞いたい魂胆だけは人一倍あるという、自己正当化のために他人のあら捜しのスパイと化していくことにも無反省だ。人を責めることだけにエネルギーを費やす。平穩無事などあるはずがない。疑心暗鬼だけが唯一の取り得。

人の欠点をあばくことよってしか保証されない、正義の味方たちの自分の安全を計るというせこい算段。人を売って初めて見返りが約束される世界。それが正義を名乗ろうと、名乗るまいと、組織集団の実体である。すべて便宜や利益優先の思考回路の容認から生まれるものばかりだ。しかし、そんな制度は宗教団体や組織ばかりではなく、ご利益信仰がお箱であった労働組合も例外ではなかつたわけであり、組合活動などとは無関係に企業内における昇進争いはまさしくご利益への最短距離だからサラリーマン氏たちのご利益への血道のあげようは尋常ではない。それゆえにそこはライバルだらけの戦場と相なるわけだ。

血など流したくないから、棚ぼたは大歓迎。運がいいことはいいことだ!? 何食わぬげを装いながらご利益にありつきたいのはサラリーマンだれしもの人情というものだろう。これでは「きたない、きたない」などと嘆いても所詮むりな話。それどころか、昔の侍たちが大将の首を挙げたり、寝首をかいたりしたのに負けずおとらず、現今サラリーマン氏たちは脛に傷持つせいか、首などを狙わず、揚げ足とりや風聞せめでライバルを蹴落としていく足技・口技の発揮が日常茶飯である。正義などどこにも出番はありませんね。

しかし、正義の出番はないといつても、そんなラッキーな機会を待望している人間ほど後ろめたさを隠す背広つまり正義がなくてはなんともやりきれないから「あの手この手の正義」が考案される。不都合のたびにひと芝居を打たなければならぬ。しかし、その正義だって時にはびしゃっとした紳士風情にみせるもつともらしい「覆面」になることがあるからこの姑息なことをわれもわれもとやりたがるわけだ。世間の誰もが苦い薬をやすやす飲みやすくするオブラードには弱いというわけである。耳にひびきのいい言葉に言い換えて自己正当化をしている場合がそれである。そして正義の挨拶を反復しているうちに、それは堂々たる風格をそなえるようになり、いつの間にか世間に通用していく。そんな手

合いは節穴をごまかすために近隣への礼儀や責任や使命をいつだって看板にして抜かりない。そんな気配りのひとを悪い人間などと見るひとはいない算段となる。あまつさえ「世界の平和のため」、「人類のため」、「国際貢献」などといった誰もが引つ込みのつかなくなるような常套的な美辞を駆使すればまんまと大成功という図式である。

実行できないから言葉でごまかしているとは世間の人はよもや疑うまい。ごまかしだから歯の浮くような麗句が並ぶものだが、世間は批評家ではないからちよろいものだ。もつともらしきで振る舞えば、誰もが「月光仮面」を気取ることができる。わたしなどは通りのいい決まり文句の正義による粉飾、虚勢が少しでも感じられるようだと、たちまちたじろいでしまい、ひたすらとんずらするところだ。紋切り型の包囲網が感じられたら逃げるにかぎると思っている。たとえ世間から排除されたとしても存在の感度が許さない。からだを受け付けられないアレルギー体質である。わたしはひたすら「正義」から逃亡してきた。これだからいつだって「裏切り者」のレッテルを頂戴するだけだ。オレを必要としていたのはオマエさんではなかったのかと言いたいところだが、悪名の返上をあきらめて、むしろ逃亡に追いうちかけられる「裏切り者」の符牒は名誉の勲章と受けとめている。そのかわり、志も歩む道も

隔りのある、もとより土俵の違う彼らに「裏切られた」というセリフはけっして吐くまいぞ。わたしはゴーイングマイ・ウエーであるから、他人様にツバする「裏切り」という言葉など持ち合わせていないからだ。

そこでは誰もがしたり顔で明智小五郎の顔をしたつもりであるが、実は怪人二十面相なのである。人の背後を嗅ぎまわり、われこそほんものの明智小五郎といわんばかりに人を怪人二十面相に仕立てあげるものだ。自分が怪人二十面相であるがゆえに別の怪人二十面相をでっちあげることによってしか、自分は明智小五郎になりえないのである。したがって、怪人二十面相ごっこをしいだ「明智小五郎」はれつきとした怪人二十面相にほかならない。寺山はそんな光景を見抜いていた。「ごり押し善良が善を確保する」というというレトリックのなかでの悪人の誕生と相なる。正義はちよろいよ、アハハハハ、と悪魔の勝ち誇った声ばかりが耳に響く。

しかし、それは戦前ばかりのできごとであったといっているのだろうか。法がよく守られていると見えるところほど法の網をかいくぐる者が多いというのは世間の定評である。しかし、法三章がいちばんだが、抜け駆けする連中がいるから法の網が複雑に張りめぐらされることになる。秩序だっている組織ほど、善良なひ

との集団という折り紙がつけられていなければならないほど、そこには統治者たちによる制御や制圧による辛うじて保つ鎮静があるだけだ。そこに存在するのは純朴・素朴は名ばかり、唯々諾々の従順だけが取り柄の思考停止の甘い汁や甘言に忠実を誓う卑屈な「物乞い」の精神ばかりである。

もちろん、体裁は「物乞い」などに見えない。すべて生活だからだ。むしろ堂々とした日常の振る舞いにさえ見えるものだ。嘘への「おまかせ人生」は習慣だ。習俗だ。彼らは余計なことは考えないことが「賢さ」だと心得ている。高給取りの上位にランクされさえれば、銀行員などはなりたいたい職業のトップに来ていたという理屈である。金融破綻後の今でもつぶれるはずはないと信ずるものにとつて銀行を見捨てるどころか、どうにかもぐりこみたいと念じているほうが多いのではなからうか。それを笑ったりしようものなら、ひがみ根性、焼きもちと一笑されるのがオチだ。偏差値という「ランク」で世の中をくぐる知恵の持ち主たちこそ幸せという段取りである。本来の賢さなど息たえだえのようだ。

賢さがなければ、それにつれて愈々幸いとなる。(エラスムス『痴愚神礼讃』渡辺一夫訳)

人と墮落を矯すことは困難だ、愚か者たちの数には限りがないからである。「伝道の書」2・16)

人類や集団がだんだん改良され、よくなっているなどという“進化”を信じるひとがいるとすれば、取り引きや妥協や不感症が罷り通っているという事態を見据えていないだけのことである。怪人二十面相をどこかに閉じ込め、ことあるたびに暗躍させているのである。どのひともしも譲らぬ正義の味方を自認しているはずだ。だれもかれもが明智小五郎ということになる。正体を見破られるのがこわいから悪漢などどこにもいないという自信に満ちている。

ネルヴァルのつぎの言葉を引用するのはしのびないが、正義の味方が増長したときにはどうしても避けるわけにいかない。謙虚であるとかないとかをとくに越している正義主義にはこんな言葉をつきつけるしか方法はなさそうだ。

泥棒、食いしんぼう、恩知らずに生まれついた子供は、畜生から生れ出たのであって、向上することもできる。善良で情愛深く生れついたものは、天使から生れ出たのだが、この人は悪魔にもなりうる。「ある手帳から」井村実名子訳)

ひとは正義を自認したとたん悪魔に変貌することを示している。正義を要求することなど最初から放棄しているひとこそ本来の天使なのかもしれない。しかし、ひとはそうは見ず、さも正義らしい勢いのあるほうにつくものである。看破されるまではまやかしが公然と正義ぶって闊歩しているという次第だからである。ルソーも正義の無力を嘆いているが、もちろん、諦めているわけではなからう。正義には現実には敵しいことはまぎれもないことだ。

悪人の悪辣な陰謀に限って成功する、善人の無邪気な計画は滅多に成功しない、とも云へるだらう。(ルソー『懺悔録』石川戯庵訳)

それだけにこの世の中そのものが正義と疑似正義の格闘の舞台にほかならぬという証拠である。そしていつもお金の力で助っ人を招き、支持は讃辞の“証明”を積み重ねて勢力を築いていく。その勢い自身が正義に変換していくだけのことである。現実にも正しいことなどおこなわれてはいないにもかかわらずである。幻の正義が大手を振って歩いているのである。

ドストエフスキーは嘘の効用を心得たひとびとの正義観をイロ

ニカルに語っている。闊歩しているのは嘘であることをばらしている。

真実を真実らしく見せるためには、ぜひとも真実にすこしばかり嘘をまぜなくてはならない。人間はいつもそうしてきたわけです。(ドストエフスキー『悪霊』江川卓訳)

カフカも正義(真実)がしゃしゃり出ることには警戒をしめしている。

真理と嘘と、この二つがあるだけだ。／真理は分割できない。だから、真理がみずからを知ることが不可能だ。それを知っているなどと主張するようなものは、かならず嘘にちがいない。

(カフカ「八つ折り判ノート・八冊」)

ニーチェは名声ある人たちと民衆と真理(正義)の関係をこれまたイロニカルに指摘している。支持される正義ほどあやしいものはないというわけである。

すべての名声高い賢者たちよ、あなたがたは民衆に奉仕し、

民衆の迷信に奉仕してきたのだ！——真理に、奉仕してきたのではない！だからこそ、あなたがたは尊敬されたのだ。
(ニーチェ『ツアラトゥストラはこう言った』水上英彦訳)

「民衆の迷信」というやつが曲者である。いつもなぜこの「悪の組織」が滅びないのかと思うことがあるはずである。ひとによってはそろそろ罰が当たってもいいころなのにと歯がみする場面である。しかし、悪はしぶといものだ。すっかり正体をさらけ出すまで、あの手この手を尽くしてのさばるに決まっているからだ。もちろん、待っているのは名誉でも勲章でもなく、「裸の王様」、「ジ・エンド」の終止符だ！

権威を保つ賢者と民衆の馴れ合い。組織の正義の規範がほころびたとしても一步も引かず、所属の持続に名誉を賭ける民衆。忠誠という倫理を正義の選択と置き換えてしまうパフォーマンスを演じててんとして恥じない。すべて「正義」の失敗の責任はトップに押しつけ、自分は洞ヶ峠を決めこむのがトップがつねに頼りにする大衆だ。狡猾で世渡り上手は大衆のほうなのかも知れない。トップが名誉や勲章を漁っているあいだに大衆はどんちゃん騒ぎして憂さを晴らしているものだ。トップは大衆の祭りの体のいい犠牲(いけにえ)なのかもしれない。したがって、たかだかこの

程度の民衆に支持される賢者はニーチェの述べるようにけつして「真理」に奉仕しているわけではない。選択をしない民衆なんて泡のように浮き沈みする幻影である。

さらにニーチェは自分の正義を主張するひとは信頼できないとも断言している。

自分の正義をしきりに力説する者はすべてに、信頼を置くな！（右同）

「自分の正義」というところに力点を置くのは、ニーチェがまだ「真理」や「正義」というものを諦めていないという証である。つまり「神々の影のない砂漠に行き、みずからの崇拜の心情を打ち砕いた人」つまり孤独の単独者には信頼を寄せ、そこにのみ「真実」があることを認めているからである。しかし、現実の社会ではそんな誰からも支持もされず、讃辞もえられない孤独者の「真実」はなんの保証もない、たよらない「嘘」に見えるものである。孤独な存在を証明する役者が整っていないは大衆は一步も踏みだせないに決まっているからである。が、もちろん、いわゆる賢者たちのように正義の味方を動員したりしない天才はいつだって孤独なのを言うまでもない。この水準の天才は支持など後につい

てくるものだと自覚しているから、「真実」と「嘘」などの違いをむきになって差別する必要は毛頭なく、ひたすら孤独に徹して「真実」の顕現のあり方を思索する。ニーチェがあえて嘘をつかないということは正直者でもなんでもなく、むしろ真理から遠いひとであるというところ、嘘だつて時には「真実」への第一歩である場合があるのである。本来的な真実には嘘とか真実とかいった立って分けは無用である。真実を強調することによって真実から遠ざかっていく例は枚挙にいとまがないほどである。

学者たちは、嘘を言わないといつて威張っている。しかし嘘をいう力がないというだけでは、真理への愛には、ほど遠い。用心が必要だ！

熱病にとりつかれぬというだけでは、認識と呼ばれるには、ほど遠い！ わたしは冷えきつた知性に信用をおかない。嘘もつけない者は、何が真理であるかを知らない。（右同）

むしろ真実など見せないでおこうというのがニーチェの立場である。見栄も粉飾も許すのである。受けて側が真実の存在に自覚的にならないことにはいくら真実をわめいてみたところで政治的に糾合するだけであつて、やがてむなしい徒労を感じるにちがいない。

ない。

わたしはいつも「正直者の頭に嘘宿る」というのが口癖だが、ニーチェの言うように真実バツチなど胸に飾るようなことがなくなるようになればわたしの標語も死語になるはずだ。しかし、現実にはなかなかそうはいかない。それは寺山の言うようになるにも第二次世界大戦を境にしての傾向ではない。いまだって大見得切る正直者がぬけぬけと嘘をまるめて大衆を動員している。騙されたり屋たちが「大見得」の看板をありがたがっている。そこはもの欲しげな性情にはうつつけの環境である。

いわゆる正義は正義ではなく、悪が正義の仮面を着ているのにはかならない。指導者とか、立派というお墨つきをもらっている偉い人とかは要するに集団・組織の親玉としての体裁を保つための幻影のイメージを作っているにすぎず、実態は人を手玉にとる悪玉の化身なのだ。勲章や保証や名誉の胸バツチをいっぱい着飾らないととても持たないから正義を抱いていないとおちおちできない次第である。評価や賛辞を得ていないと少しも前に進めないひとはいるものである。民衆の愚かさの反映が公平に金ピカの名誉の固まりに表出しているというわけである。もちろん、両者とも信用ならぬことおびたしい。威勢だけで世渡りする連中は往々にして正義の味方ぶるものであると注意をうながしたいほど

だ。

2 月光仮面の登場

悪が正義の仮面をかぶっているとすると、本来の正義の居場所はいったいどうなるのだろうか？

かくなれば負けずに仮面を付けるにかぎる。それには、いわゆる「支配する」「指導する」正義などの権威の匂いのしないトレードマークが必要である。「月よりの使者」というふれこみで颯爽と登場する月光仮面は、白いターバン、白いマスク、白ぶちのサングラス、白いコスチュームの覆面姿がトレードマークである。手垢のついていない新鮮さが売り物である。一切の概念を拒む可能性に溢れた出で立ちである。概念を払拭しているからこけ脅しがない。白いマントは優雅であると同時にあまたの人びとを包みこむ優しさを示しているようではないか。何かやってくれそうな気が配が全体にみなぎっている。とはいっても決して肩をいからしてなどいないところが魅力だ。仮面すなわち仮そめをその都度その都度こりずに架設していく根くらべをするにかぎるだろう。

マントは当時テレビ放映したアメリカの『スーパーマン』にあやかっただけであらう。覆面の中から発する声はくぐもっていて

正体がわからず、堂々とした正義の声でないところが魅力である。当時はスピードの化身として新鮮だったにちがいないロケットオートバイは今日では迫力不足が否めないが、突如出現し、突如消えていく謎めいた単独者の小道具としてはなかなかなものだ。オートバイに月光仮面の分身を見た少女少女たちがいたはずである。

しかし、この覆面姿は、寺山がいみじくも指摘するように怪人二十面相がやむをえず月光仮面に扮しているものかもしれないのだ。それほど明智小五郎という正義の味方の軍勢は怪しげな環境に取りまかれていた。現に月光仮面の分身といわれる名探偵・祝十郎も月光仮面の活躍の陰にかくれて影が薄いではないか。今やいわゆる正義劇は大時代的になってしまっている。パロディとしてなら名探偵も生きるかもしれない。むしろどこか間抜けさがあったりしたほうがいいのである。あるいは古めかしい感じを出した明智小五郎とかのほうがまだ持つかも知れない。地球の名探偵はお飾りで、スーパリーな月光仮面が忽然と登場し、どこかへ忽然と消えていく神秘性こそ少年少女に参与させるものがあるのだ。『スーパーマン』も確か新聞記者のクラーク・ケントがこの世の实在の人物として活躍し、現実と神秘が補完しあいながら視聴者の空想を刺激したのである。神秘は少年少女の夢と交信す

る介在役を担っている。固定した正義など子どもだましであることを当の子どもたちのほうがとくに見抜いているのだ。いざというときに出現する正義は自己主張としての正義などにはまったくない仮そめの鮮度がそなわっている。

正義が「月よりの使者」としてしか登場できない現実社会にはもはや括弧つきの正義しか存在しないことを意味し、それゆえ少年少女たちは辛うじて仮設性やエフェメラルな淡さをたたえた月の使者に夢を託すのである。それは淡い健康な夢である。いずれ彼らは月光仮面の影を感じて大人として生きていくことになるはずだ。

川内作詞の「月光仮面主題歌」(キング・レコードから発売されヒットした)をみてみよう。

♪どこの誰かは知らないけれど

誰もがみんな知っている

月光仮面の小父さんは

正義の味方よ善い人よ

疾風はやてのように現われて

疾風のように去って行く

月光仮面は誰でしょう

月光仮面は誰でしょう

「^{はやて}疾風のように現われて／疾風のように去っていく」という歌詞に象徴されるように実体を刻まず、残さない、後くされのない正体不明な存在が月光仮面である。また「月光仮面のおじさん」と歌われるように分別盛りの年齢である。それが「疾風のように」というのだからほほえましい。正義は正義もどきとは一線を画していないと取りこまれてしまうので覆面をまとわなければならないし、疾風のように立ち去らなければならない。疾風は出、来、事を記すのみでみずからの匂いや記憶をとどめることがない。仮、その、粹の領域に属する。ここには、古代人が月を「月影」と表現して、たんなる「月の光」よりも人間の複雑な心情を托して「月影」に「光」と「幻影」を緊密に結びつけた事情が見えてくる。

ライブニッツは、ある距離から見た池の魚はひとつひとつ見分けられず、混雑な運動、蠢きにしか見えないが、それは混雑でも混沌でもない、単なる外観なのだ、と『单子論』で述べているように、月光仮面だつて見るひとが見れば、なにも事件のたびにもつたいぶつて登場し、さつさと引き揚げる神業ばかり披露する、あかなきか定かでない存在としてではなく、運動する正義として認められるはずである。部分部分が永遠に流動し、河の流れに出

たり、入ったりするものであることをライブニッツ流に考えないと、正義は永久に正義であると思ひこんだり、反対のものは永久に悪であると決めつけたりする概念的なものになりかねない。それは仮面の正義と正義の仮面同士の八百長、妥協の馴れ合いが日常化するだけだ。仮面の名において横暴な秩序づくりにもおさおさ怠りないことにもなる。ともかく集団自身が正義と呼ばれた風潮が根強い。公認された集団組織はまずもつて安泰を約束される。法律の操作をまかされる国家は最高の正義の棲家と相なる。少しぐらいの横車押しをしても怨嗟の声が届かぬかぎりには正義にヒビが入ることはない。いつも正義であるとは厚かましいかぎりだが、正義を手放したくない根性は相当なものである。正義とは正義の発動の一点においてだけ認められることであつて、根拠を持った正義など断じて存在しないのである。

「月光仮面は誰でしょう」と呼びかけざるをえない作者の心境には同情せざるをえないが、正義というものがつねに知らず知らず顕在化したときにしか評価できないという苦渋の表れである。もちろん、少年少女たちにそこいらの政治家や経済人や指導者と目されるひとのようなつねに取り繕いばかりの欺瞞的な生き方ではない正義の体現者になつてほしいという願いが反映しているのである。もちろん、彼らが将来、「正義の体現」という理想と現実の

葛藤に悩むであろうことは当然としても、月光仮面に夢を託したことをむなしくは思わないだろう。東の間見た月光仮面の影を感じながらみずからの内在する月光仮面と語りあいながら選択や判断をし、態度を決めていくだけでも心に月光仮面を養っているひとは幸せかもしれない。わたしは作者が懸念するように月光仮面の出役を見ない社会のほうが幸福な世界であることは忘れていないわけではない。

こんな月光仮面を生んだ川内康範はそのへんの正義の実体をよくよく熟知しているといえよう。あくまでも正義そのものを弁証法的に止揚しようとしているのであって観念的ではないからである。

3 テレビ映画の『月光仮面』

『月光仮面』はいまや一人歩きしているが、最初は川内康範・原作によるテレビ映画から始まった(昭和三十三年二月)。ついで川内康範・原作、桑田次郎・画による雑誌『少年クラブ』(昭和三十三年五月号から同三十六年十月号)の連載となった。桑田の描いた目鼻立ちのはっきりしたキャラクター造形がテレビ放映と相まって人気に火をつけ、スーパーヒーロー・月光仮面の流布に大

いに貢献した。

漫画版につづいて東映が同年七月から翌年八月まで六本の『月光仮面』シリーズを製作したが、こちらはヒットせずじまいであった。(注・北海道のTVHでは一九九九年から二〇〇〇年にかけてアニメの『月光仮面』を放映しているが、アニメという性質上、月光仮面のキャラクターのさつそうたる振る舞いが希薄にみえるのはやむをえない)

締めくくりに単行本版『月光仮面』(昭和三十三年九月、南旺社刊)が送り出された。その第一部の「まえがき」に川内氏は「少女諸君!」と呼びかける一文を寄せている。

この本に書かれたことは、いまの日本に、本当に存在はしない。

だが、これにやや似た事件は、実際にあるし、これからも先も起きる可能性がある。そして、月光仮面のような、神の心をもつた人が、自分の善行を誰にも知らせることなく、この世の中をよくするために、闘っている——ということを感じて下さい。(川内康範「少女諸君!」)

さらに「あとがき」ではこう記している。

この小説を書いている間にも、世界のあらこちで、いやなことがいろいろ起りつつあります。

中東地区——レバノン、イラン、ヨルダンなどの争いもその一つです。どんな事情があるにせよ、武力の争いというものは感心しません。

しかし、これからの世の中は、少年少女諸君の努力によって、もっともつと平和になるでしょう。（『月光仮面』あとがき）

作者は日本の事件や世界の政争に関心があるらしく、暗に現実の世の中を映し出していく。昭和二十九年にビキニマグロや水爆マグロや放射能雨が話題になり、同年、核爆発の影響で何万年、何十万年の眠りからさめるといふ本多猪四郎監督、円谷英二特撮監督の『ゴジラ』や同三十年に黒澤明監督が『生きものの記録』（東宝）によって原水爆反対の立場を明確にしたような地獄図絵のような時代背景が『月光仮面』にも濃厚に反映していることは言うまでもない。第一部「ドクロ仮面」に引き揚げ孤児兄妹繁や木の実を描いているところには作者の引き揚げ促進のために働いた事情がうかがえる。いずれにしても社会意識の相当強い作品といえる。

『月光仮面』の第一部は中山博士が発明した特殊爆弾をめぐる

どくろ仮面団が機密を狙うというテーマであり、まさに当時の国際状況を深刻に映しだしているのである。

実在しないマンモス・コングや手段を選ばず欲しいものを手に入れようとする妖術を使う幽霊党のような怪物に匹敵する、紳士の仮面をかぶった連中^がが存在することを作者は見逃していない。毒物学者の白上博士がイコール白髪鬼であったり、軍需産業界の大物田坂に旧悪があつたり、世間的に善人と思われているひとはいつも悪の爪が忍びよる。善玉ほど悪の餌食に狙われる。「悪の爪が忍びよる」「狙われる」といったら語弊があり、善人面下げて悪の権化を演出しているというべきだろう。「善人」「正義」は体面上の武器に他ならず、現実には悪という大執着者である。すなわち政治や経済を私するのはそれらの仮面紳士たちだ。博士といわれる人の周辺には事件が事欠かず、利権を求めるひとたちが研究の成果に踏みこんでくる事情がある。

『幽霊党の逆襲』には砂川事件をイメージしている。東京近くの月ヶ島でささやかな生活をしているひとびとの平和を乱す怪事件。月ヶ島を選挙地盤とする谷川剛一郎代議士が幽霊党を捕らえられぬ警視庁の松田刑事に辞職を勧告するが、その谷川こそ幽霊党の党首であることをつきとめる。権力者の利権を描破していく。まさに仮面紳士がのさばっている。生まれた土地を守ろうとする

ひとびとを月光仮面が味方するのである。

ところが、日本初の子ども向け国産テレビ映画『月光仮面』の放映は意外な展開になった。

『月光仮面』は昭和三十三年二月二十四日(午後6:00～6:30)に第一回の「どくろ仮面」を皮きりに放映、第二回以降は月曜日から土曜日の午後六時から六時十分まで十分間(正味は七分間)の連続ものとして放映された。最終回(七十一回)は同年五月十七日であった。

「ドクロ仮面」「パラダイ王国の秘宝」「マンモス・コング」「幽霊党の逆襲」「その復讐に手を出すな」と続いた。

子どもに圧倒的な人気を呼んだ。当時の状況を視聴率の分析を通して瓜生忠夫が描いている。

そのことを、一九五八年(昭33)六月二十三日、つまり『パラダイ王国の秘宝』の第五回『正義の逆襲』が放送された翌日、宣弘社で行った視聴調査は明かにした。調査は東京都二三区内テレビ所有一般世帯を母集団とし、その中から標本として三三〇世帯を無作為抽出、面接で行われた。回答回収数は二八九世帯、回収率八七・六%であった。その結果は次の通りであった。

一、視聴率は四六・七%で、月曜～土曜の帯番組として放送され

た『ドクロ仮面』の平均視聴率三〇・七%(電通調査)よりも上昇している。

二、『月光仮面』の視聴率を七歳～一五歳の子どものある世帯と、ない世帯とで比較すると、前者では七二・六%、後者では二七・四%で、大きな差異がある。

三、視聴者の年齢別構成は、二〇歳以上が三二・六%、一九歳以下が六七・四%、性別で見ると男性の方が女性よりやや多い。

四、『月光仮面』が武田薬品の提供であることを知っていた世帯は一五・六%、視聴世帯でさえ二五・九%、非視聴世帯は六・五%と、きわめて低率であった。(瓜生忠夫「連続テレビ映画第一号」『調査情報』昭和四十二年五月号)

子どもに熱烈な支持をえながらスポンサーから横やりが入った。当時の様子を『スポーツニッポン』から引用してみたい。

——「幽霊党の逆襲」は「谷川剛一郎という代議士がヒーローをつとめており、ギャング団のボスとなった彼が悪徳の限りをつくすというのがテーマ。もつとも彼にはウリ二つの剛次郎という弟がいて悪事を働いているのは弟の方。兄が代議士になったのを幸いに、あるときは谷川代議士を名乗り、あるときは幽

霊党のボスとして悪業を重ねた末、結局は兄に正体を見破られる、という勧善懲悪が描かれているが、撮影が終わったいまになって、このプロのスポンサーのいい分は『代議士が悪事を重ねているという印象が強すぎて、最後まで代議士が悪いという物語だ。これは児童向けの番組としては大変不穏当である』というもの」であつた。（『スポーツニッポン』昭和三十四年二月九日）

スポンサーも仮面紳士を「援護」して恥じないというわけである。しかし、実際は、所詮プロローカーにすぎないような代議士ほど威張って徘徊しているのが日本の縮図ではないか。「有害番組」の指定はテレビ四十年史の中の汚点ではあるが、作品自身にとつては今となつては名譽な「弾圧」といふべきだろう。世に受け入れられない作品こそ本音で闘っているといつてよいからである。

世の中はいつだってインチキ性が先行するものだ。本物は外にはじきだされる。既存の集団があるかぎり誰もが利権を狙っている。全政党がこぞつて「政治改革」を叫ぶなんていう波長の合いぐあいは異常というほかない。うしろめたいから同じ合言葉を交錯させてその差異すら明確にできないでいる。まかり通るのは「多くの嘘」ばかりである。

パスカル先生も言っている。

多くの確かなことが反対される。多くの嘘が、反対なしにまかり通っている。（『パンセ』前田陽一・由木康訳）

当時、テレビにたいして過剰な思入れをいだく傾向が強かつたことも確かであるからちよつとした加減で番組に注文がついたものだ。大宅壯一が「一億総白痴化」といったのは昭和三十二年初めのことであり、流行語にもなつた。このフレーズが一人歩きし、テレビにたいして「わるい」という先入観を植えたことは否めない。さすがに大宅は優れたジャーナリストであるだけにそれだけでは不十分とみたのか、翌三十三年には「ラジオ、テレビは「一億総白痴化」の役割を果たす一方、「一億総評論家」時代を現出しつつあるともいえる」と修正し、テレビの効用を認める立場を明らかにしている。まさに『月光仮面』排除のできごとはテレビ草創時代の受難のひとつまであつた。

受難には追い打ちが重なる。そうなるにつぎのような「推測記事」までが出回る。子どもたちに人気があることは先の視聴率に明らかだが、「低下した内容」とか「子どもたちさえバカバカしくなるのではなからうか」などと茶々を入れるありさまでは作者が裁判に訴えようとしたのは当然である。

テレビの人気番組『月光仮面』が、番組から消えてなくなりそう。理由は、人気があるとはいふものの、おそろしく低下した内容だから、という至極もつともなもの。

前のシリーズだった『マンモス・コング』あたりはまだしも、最近の『幽霊党の逆襲』になるとコウトウムケイを通りこして、正に噴飯ものである。現代の東京に、写真にとつても足のうつらない幽霊団員が出たり、首領が妖術をつかったり、しかも、何の意味もないのに都民を殺りくしようとしたりする。

また、月光仮面の立ちまわりは、掌から紙テープのような糸をひろげたり、とんぼ返りをしたりの大活躍。しかも伴奏音楽が無声映画時代の剣げき音楽とあつては、子供たちさえバカバカしくなるのではなからうか。

この『月光仮面』に真つこうから反対しているのが、小学校の先生たちだそうで、『俗悪漫画本以上』というレッテルをはられている。

同様に、スポンサー側でも、人気があるとはいふものの、これでは商品にキズがつくのではないかと、二の足をふみはじめたそうだし、放送しているNR自身も機会があればいつでもやめるという体勢だという。(『週刊新潮』昭和三十四年三月二日)

「コウトウムケイ」というのは非難のつもりだろうが、むしろこの映像は「コウトウムケイ」を装いながら事実の背後を描こうとしている。ただ単に「コウトウムケイ」だけに終わっているようなしるものではない。そうだとすれば、『週刊新潮』の記者こそ偏見に満ちた記事を書いていることになる。幽霊や妖術のことだけをとらえて「コウトウムケイ」と片づけるのは短絡的である。『月光仮面』の本意はつねに人間の二重人格性をついていることを見逃しているからである。大物ほど表街道と裏街道をもっている。政治家がやり玉にあがるのは当然である。

ともかく第五部の制作を続行した。

「小学校の先生」が「反対」しているというのとはともかくとして「子供たちさえバカバカしくなるのではなからうか」は予断である。同じころ子どもたちへのアンケート結果が出ている。

ところで、これより少し前、大阪市立教育研究所、市立保育所観察研究部、市立墨江小学校の先生たちが共同で、大阪市内の六百人の保育所幼児と小学生を対象に行つた調査によると、『月光仮面』の魅力は、①オートバイに乗っている②マンモスコングと戦う③人を助ける④勇ましい⑤服装がよいという順序であつた。『月光仮面』の子どもたちに対する影響を、あまり

神経質にさわぎたてることはないといえる『子どもたちの声』であった。「『月光仮面』の反響」『調査情報』昭和四十二年六月号）

テレビ出現の初期はいかに「コウトウムケイ」な意見がまかり通っていたかは今から考えると隔世の感があるが、笑ってばかりはおられない。どうせ同じような大上段からの正義の発揮という反復をまた性懲りもなく他の対象にたいしてするものだからである。なんでもかんでも女性蔑視に結びつけてポスターの撤回を求める女性団体など類似の動きである。

その意味でもう一つ例示しておこう。

テレビ悪影響論は初めのころはかなりのものであった。『キネマ旬報』に早川元二という心理学者らしい人物が心理学的にテレビに注文をつけている。ドストエフスキーやカフカは心理学をいかに慨嘆していたことか。カフカなどは「心理学は、焦りである」

（「八つ折り判ノート・八冊」飛鷹節訳）や「心理学は、もうこのあたりで沢山だ！」（「罪、苦悩、希望、真実の道についての考察」飛鷹訳）というセリフをわたしもあらかじめ引用しておきたいほどだ。なぜなら、わたしは早川氏にやはり心理学者の結論を急ぐ傾向あるいは心理にかこつけて真相を究明したかのごとくにきつ

ぱりと断定する手法を見たからである。

テレビの人物の類型化を嘆く早川氏自身が心理学の類型学を応用している最大の類型学者ではないのか。テレビ上の類型はナンセンスで、心理学の類型は科学的だと信じて疑わないのだろうか。類型的な画像に侵されたテレビっ子たちは利那的になってしまったということをも疑わないのだろうか。科学というものが実証主義であるならば、かつてのテレビっ子の行く末を追いかけるのが発言の責任として当然なすべきことである。それとも心理学なんて所詮その場かぎりの取り繕いよ、と鼻であしらうならわたしには何も言うことはない。

この学者には「善悪に真の意味」があると思っている節がある。心理学の「正義の味方」らしいのである。

少し長くなるが、これほど善と悪を真剣に考えているひとはないようにおもうので紹介しておきたい。

この『月光仮面』のような番組には（この他に、同傾向の番組として『まぼろし探偵』『豹の眼』『少年ジェット』『鉄腕アトム』『遊星王子』などがある）一つのきわだった特色がある。それは、善人と悪人とが一見して見わけがつくように類型的に分けられている点である。善人は殆どキリッとした立派な顔をし

ており、白装束とか、白いマフラーとか、特別の形のメガネとかで、すぐ正義の側であることがわかるし、悪人は、いわゆる凄みのある悪人面で、その上、顔にキズがあるとか、頭がクリクリ坊主（『少年ジェット』『豹の眼』の悪役）とかで、『ヒヒヒヒ』と笑ったりするし、その服装も、大体、黒装束で、大きな一つ眼（月光仮面）とか、ガイコツのマークとか、頭に大きな角のある帽子に、ピカピカの長マント（『少年ジェット』の不思議な化学者——こんな姿で平気で街を歩くというのが、そもそも不思議すぎるが、そんなことはどうでもよいらしい）とか、馬鹿げた妖術めいた呪文（『月光仮面』の幽霊党の頭目）とか、醜怪なマンモスコングとかで、これまた、一見して、すぐ悪人の側であることがわかるのである。すなわち、『よく考えなくても、どちらが善人で、どちらが悪人かがわかってしまう』というように作ることがその作劇法の重要な点になっているのである。この善と悪とを類型化してしまうというのは実は子どもたちの思考の特色に合っているのである。子どもはよくテレビを見ながら、お母さんに『あれ、良い方、悪い方』と聞くことがある。それは子どもたちの頭の働きの幼稚なので、人間の人格の特質を善と悪との二つだけのどちらかに分ける位の分け方しかできないのである。つまり、単純に善の側と悪の側に分けること位にし

か思考力の働かない子どもたちの弱い思考活動をちゃんと計算に入れて、すぐ善人か悪人かわかるような類型的な人物を出すわけである。そこで子どもは最初から考えることを中止してしまう。そして形だけで善悪を決め、善悪の真の意味を考えようとする思考活動をも中止してしまうのである。このことは筋についてでもいいえる。筋も完全に類型的である。大抵、悪玉が何か大切な秘密の地図か、宝をねらい、それを守ろうとして善玉が活躍するという最もありきたりの筋であり、恐ろしさも、悲しさも、喜びも全て類型的である。例えば恐ろしさは牢にとじこめられるとか、その牢に水が入ってくるとか、四方からピストルでねらわれるとか、断崖絶壁から落ちそうになるとか、怪物におそわれるとかいうような実に誰にでもすぐわかるような単純な類型的な恐ろしさなのである。

また、これらの番組は実にテンポが悪く、大人はイライラしてしまうが、情ないことにこの下手くそな作劇や演出が、たぐまずに、のろいテンポの子どもの思考活動に合っていることになるのである。

さて、このような類型的な善悪の判断や、筋の展開や感情の受けとり方の中では、子どもは真剣に社会や人間の本質を考えることをやめ、それこそ、いいかげんに刹那刹那のスリルだけ

を追いかけることになってしまふのである。（『キネマ旬報』昭和三十四年十月下旬号）

裁きを下す裁判官のような自信に満ちた口調ではないか。この方はチャンバラとか、空想的なSFとか、大衆小説のようなものには出会ったことがないらしく、黒装束とか、ガイコツのマークをつけて街を歩く姿を描くのが「不自然」などという根拠をどこに求めているのだろうか。相当、リアリズムの描写に浸ってきたのにちがいない。『月光仮面』を見た子どもたちがまるで「典型的な善悪の判断」の持ち主になってしまふという断定の仕方であるが、刹那主義に陥っている張本人は教導すべきはずの当の大人側ではないのか。それでは手前の非を棚に上げての正義論にならないでしょうか。

この後で「このように人間の本質や社会の真実に子どもの眼を向けさせることをわざとやめて」とおっしゃるが、「幽霊党の逆襲」では代議士先生をやり玉にあげると、すかさずスポンサーあたりから「代議士が悪事を重ねている印象が『よい』などと『逆襲』されているのは作者の側であることをどう見るのだろうか。先にもすでにいくつもの例示をしたように正義はオブラートをかぶせて『暗示』しないかぎり表現不可能なのである。匙加減してすら

当事者は困惑のていである。作者は少しも現実や真実から目をそむけてなどいないことをもう一度この心理学者先生は認識しないことには何を言っても無力である。ましてや「親と一緒に話し合いながら見る」などといった提案は子どもの羽ばたく空想力まで監視し、育てるといった管理の要請ではないか。貧困な空想力はないじ自身ではないのか。

真実、真実は嘘の始まり。正直者の頭に嘘宿る、ともう一度繰り返しておく。なぜならこの心理学者先生はよほど「真の」とか「真実」がお好きらしいからである。そんなに大事な「真実」があつて、番組を「低俗」の名のもとに切り捨てようというのなら自分で立派な番組の制作をおやりになったら——。子どもがそんなにあなたの言うなりになってほしいなら裁いてばかりいないで、みずから理想の実現のために、「真実」のためにちゃんと闘いなさいよ。

『子どもの想像力は豊かだ』と一般に考えられているが、子どもの頭の中の材料が少なく、その少ない貧困な材料を集めて空想するから、出来上つた空想が奇想天外で面白いのであつて、それは真の建設的な空想ではないのではなからうか。すばらしい空想は、本当に自然や社会の真実がわかつて、その真実の材

料を組立てて作る空想でなければならぬ筈だ。そこで、テレビが社会や自然の真実をはぐらかして、デタラメなものを子どもに与えていると、子どもの空想性の内容は当然貧困になってくるのだ。その貧困な空想に迎合して作られたデタラメな空想物語など子どもの将来のためにはならないのである。(右同)

「デタラメ」とは恐れ入るが、こんな言葉を高飛車に連発していれば、己は真実であり、正義だと錯覚しているところに心理学などにかぶれた分析家の野放しがあるだけで、本当は何も言っていないに等しい。この人にかかれば「デン助もの」「おトラさんもの」「轟先生もの」「お笑い三人組もの」など子どもに人気のあるものはすべて「悪ふざけ」を強調するものにすぎない。わたしに言わせれば「大人がまじめに熱心に社会のためにつくすその努力」などという保身用の符牒のような建前は馬にでもくれてやれ、と言いたいところだ。あなたの言う「真実」「まじめ」などというものは説教癖のあるひとによくある「嘘」つきの症状である。実は「熱心に社会のためにつくすその努力」などこれっぽちもしていないはずだ。言葉の綾で世の中を運んでいく手管があるだけのことだ。太宰治のつぎの言葉が思い出される。

(四〇)

嘘のない生活。その言葉からしてすでに嘘であった。(太宰治「ロマネスク」)

『月光仮面』はまぎれもなく大人の「まじめ」や「努力」のむなし軌跡をなぞり、それをみごとに描写した作品である。けつして子ども騙しをやっているわけがない。少なくとも現実に不満を持っている人たちに諦めることなく、何とかしなければならぬと、希望を与えてくれただけでもその功績は小さくない。残念なのは世の中のほうがここに暴かれるような実情であることである。いつだつてどろどろしている、負い目を持った世間のほうが逃げ腰なのである。

作者には何度も『月光仮面』のリバイバルのチャンスがあったにもかかわらず、現実のほうがはるかに作品の空想をしのいで欺瞞や偽善や悪の構造をさらけ出していること見抜いているゆえ、ことさら追い打ちかけるようなことを回避していたようにすら思われる。それは直接本人に確かめるまでもない。作品がそうして自然な軌跡をみずから描いているとわたしは解読しているからにほかならない。

月光仮面は溢れる悪に対してけつして焦ることはなく、ひつきりなしの出番を覚悟している。悪の退治の忙しさを嘆いたりし

ない。悪に振り回される宿命を当然のことと自覚しているから真実や正義を説いて人をひれ伏せさせようなどとは考えない。だから、いつもたつぷり時間を持っている。心理学のように決して焦らない。焦燥との決着を月光仮面はつけてくれるだろう。もちろん、焦燥を克服するものこそ月光仮面、その悠然たる判断者、選者者の道を進む月光仮面はあなた自身にゆだねられていることは申すまでもあるまい。崇めたてまつるような、決定的な正義などこの世にはないこと、一瞬一瞬の仮、その正義しかないことを「月よりの使者」がいちばん知っている。

光の綾なす「影」のようなはたらき、それは仮、そのめであり、仮象であり、非日常的空間の作用であるが、ここに思いを馳せることができるもののみが日常的空間に辛うじて正義の何たるかを思うことが許され、白昼堂々の正義などふりかざさないたしなみを身につけていくだろう。

4 ブームとなった『月光仮面』

月光仮面のブームを呼んだのはKRT（現在TBS）のテレビ映画の第二部「パラダイ王国の秘密」を放送したあたりからのようだ。視聴率でも「スーパーマン」（KRT）、「私の秘密」（NH

K）につづいて第三位であった。

♪月の光を背にうけて

仮面にかくしたこのころ

風が吹くなら吹くがよい

テレビっ子たちは主題歌を歌った。家のなかから白い布を引っ張りだして扮装した。男の子たちは競ってタオルを頭に巻き、白い風呂敷を首にゆわえつけて、黒メガネの出で立ちをした。月光仮面が全国津々浦々の路地や空地に出没することとなった。やがてブームに乗って、巷にはターバンつき月光仮面お面、月光仮面メンコ、月光仮面二丁拳銃が出現した。子どもたちの人気者は、どじな袋五郎八（祝十郎の助手）などではなく、ましてや窮地に落ちこみ、救助される繁少年でもない。もたもたしていると、どうぞう弁のカボ子に仕立てあげられる。生意気言っていると、どくろ仮面やサタンの爪の悪の化身を演じなければならぬ。遠慮したところで祝十郎探偵にでもなれば大成功。それよりも何よりも先を競ってスーパーヒーロー・月光仮面になりたがった。ヒーローはいつの時代でも奪い合いになるときまっている。

テレビで月光仮面を演じたのは無名の大瀬康一であった。当時、

二十五歳の青年であった。もちろん、仮面そのものがスターであった。スーパーマンのように自由自在に空を飛来することはできず、せいぜい十メートルほどの「超能力」であつても子どもたちはマネをした。ブームの頂点には二階から飛び降りてケガをする例が続出したほどだ。月光仮面旋風は到るところに月光仮面のエピソードを生み出した。

(閑話休題。『月光仮面』で顔のないヒーローを演じた大瀬康一は昭和三十七年十月から始まった『隠密剣士』に隠密剣士・秋草新太郎として登場、正義の味方を演じ、一躍名をあげた。月光仮面の功德もあつただろうが、30とか40%の視聴率をあげたのは、山田風太郎の忍法小説の人気と忍者ブームとが重なつたことにもよる。製作は『月光仮面』のときと同じ宣弘社プロダクションであつた。)

『月光仮面』の人気の「威力ぶり」はブームの年におこなわれた「小、中学生はどのようなテレビ番組を好むか」という日本読書学会、出版科学研究所の行った都内の小、中学生約八千人を対象にした読書調査(一九五九年)の数字によって裏づけられている(「調査情報」一九六〇年一月号参照)。

「小・中学生の好むテレビ番組」ではつぎのような順である。(1)名犬ラッシー(2)野球(3)私の秘密(4)月光仮面(5)プロレス(6)スーパー

マン(7)怪人二十面相(8)ローンレンジャー(9)名犬リンチンチン(10)デイズニールランド。

これを男子学童と女子学童の違いを見ると、男子のトップは「野球」、ついで「名犬ラッシー」、「月光仮面」、「プロレス」、「私の秘密」、「スーパーマン」とつづく。女子のトップは「名犬ラッシー」、第二位以下は「私の秘密」、「月光仮面」、「パパは何でも知っている」、「怪人二十面相」、「ビーバーちゃん」となる。

「月光仮面」は男女差なく、コンスタントに好まれていることがわかる。

学年別に見ると、「月光仮面」は小学3年で1位だが、4年では2位、5年では3位、6年では4位と順位低くなり、中学2年では姿を消している。この数字はテレビにもっとも積極的な小学3年あたりの主体的な選択の数字であることを見逃してはならない。受け入れる土壌がまずあるということである。一見、恰好よさみたいなどころだけの模倣に見えるが、子どもらの正義の感受性にマッチした内容ゆえヒットし、ブームにまで火がついたことは誰も否定できない。上のデータは大人びていくにつれ、パターン化している「月光仮面」などばかばかしくなっていることは疑いないが、逆に大人になるということは自身が大人の社会のお仕着せの思考をパターン化して身につけていく表れでもあるから、

この数字の結果を喜ぶことは目くそ鼻くそを笑うことになりかねない。したがって、学年が上がっていくということは、「月光仮面」的なマントやターバンの持つ正義の「イメージ」や「態度」をどこかに脱ぎ捨て、鋭い感受性を放棄していく過程ともいえるから「月光仮面」が顧みられなくなる成長というものは哀しいものがある。

月光仮面の額の三日月のマークは魂の再生のシンボルである。三日月はイスラム教を奉ずる国々の国旗のシンボルとなっているところにも魂との深いかかわりを見ることができだろう。ブームが子どもの単なる遊び心に由来しようと、そうでなかつると、三日月は「月光仮面」の核に蔽としてあるものだ。月光はだてに思案されたものではない。「月よりの使者」はすなわち太陽系世界への警告としての現れ方をしている。太陽系の横暴にたいする反省を求めている。太陽は生命を育む源であり、葉緑素を生産し、人間の血肉の肝要な源泉であり、また、すべてを照らす根源であるが、その恩恵をこうむっている生物のなかでも人間が一番それをむさぼる存在であり、太陽系世界に恩を怨で返す破綻をもたらしているといつてよい。道義も正義もあつたものではないのである。これをエコロジーなど持ち出してそれみたことか、などと言われては困る。そんな次元でわたしは展開していない。小出しに

出される正義のほとんどは増長慢である。無責任なものである。改善が可能だと信じている人たちの思いこみだけがさらけ出され、何ひとつ解決などしない。

子どもたちはそんな高尚な理解力はないが、本能的に「超」という能力に憧れるものである。戦前の少年たちが「快傑黒頭巾」や「鞍馬天狗」に憧れたのと同じことである。大人たちの欺瞞の秩序を再生したいとは思わないまでもインスピレーションではすでに不信を抱いていたにちがいない。ともかく、むなしさのはげぐちに過ぎないかもしれないが、お面をかぶり、飛んだり跳ねたりしたくなるわけだ。

月はしばしば犯罪の原因にされることがある。『ジークル博士はハイド氏』では満月に殺人事件が起きる。リーバーは『月の魔力』という本の中で月の影響を思索し、エジプト王朝をはじめ、シュメールの軍国主義、ヘブライの一神教、ギリシアの合理主義などは月の女神崇拜を抑圧した結果であると指摘するあたりはなかなか魅力のある発言である。月のほうが無意識や感情構造に深くかわるものとして欠かせないことを分析している。インスピレーションの元であり、バランスの源泉であるとする。男性原理にたいする女性原理の設定でもある。

リーバーの著書からつぎの箇所を引用したい。

月ののつとつた生活様式を歴史的に家父長原理によって抑圧してきたおかげで、社会や個人はむしろ生まれかまされてきた。西洋科学により物質的にたいへん豊かになった。しかし現代的生産方法により地球はつきつきに略奪され、自然のバランスはまったくないがしろにされてきた。人類は論理を貫きとおしたおかげで、危険な状況におちいつてしまっている。現代の絶望的状况は、月明かりの中でこそよく見えるのである。

月が狂乱や犯罪を引き起こす、といういい方は妥当でない。しかし、月の影響や月の意味するものを抑圧してきたため、社会的緊張は不協和音が生まれたり、いたましい事件やときには奇怪とも思える出来事が生じる、といういい方はまさに当を得ている。精神的バランスを失った人々や宇宙からの力に対応できないほど硬直した社会にとって、月は殺人鬼と化するのである。

(A・L・リーバー『月の魔力——バイオタイドと人間の感情』藤原正彦・藤原美子訳、東京書籍)

日本でも月の引力の調査が行われている。兵庫県警交通部分析による月の満ち欠けと交通事故との関係の深さを報道する記事を一ひとつ紹介しておく。

月の引力の影響が大きくなる満月、新月の時には平均を大きく下回っていた。ところが、満ち欠けが始まるに従って増加し、引力の影響が小さくなる上弦の月の時には、十九万九千四百七十六件で最初のピークとなり、下弦時の二日前には十九万九千八百三十五件と最も多くなっていた。(『朝日新聞』一九九二年十一月十二日夕刊)

月はみずから犯罪をそそのかしておきながら、みずから制裁しなければならぬ宿命を持っているというわけである。「月からの使者」は哀しい使命を持っているのである。

月光仮面の白装束についても民俗学的な理由がある。

白は記紀によると、日本では赤とともに最も愛された。清浄潔白の旗印であった。

長崎盛輝は白が敬愛される消息をつぎのように述べている。

当時の人々は自分にも対象にもそのことを要求したから、白い物をすべて敬愛した。真珠をましろのたま真白珠と呼んで、珠玉の中でも最も神聖視したのはそのためである。このように白は清らかなこと、明らかなことを基調として、更に純粹、神聖などの内容を加えて発展した。しかし白といっても、しら(素)、すなわち

明るさの中にかすかに色味を含んだ、いわゆるオフ・ホワイト off white の色を指す場合と、純粹な白色を指す場合とがある。古代のしろはその両方を指したであろうが、いずれも觀念上では変わりはない。白心は明らかな心の意から、誠の心を意味するようになり、それはまた、含むところのない真実の象徴として、軍使のかかげる白旗や降伏のしるしに使用された。白心がまごころを象徴する点では赤心、丹心と相通じる。(長崎盛輝『色の日本史』淡交社)

小田晋は白か黒かの二者択一の判断を無理やり意味づけすることとして融通がきかないことを指摘しているが、その通りである。

大抵の場合、人間は、周囲にむりやりの意味づけを行うときには、悪意や、危険や、死を、つまり「黒」の意味賦与を行うのであり、通り魔犯罪は、こういう『黒の意味づけ』の産物なのである。(小田晋「精神医学の白と黒」、『季刊・自然と文化』一九八五年新春号)

「白」をふりかざしてマニ教や分裂病者のように白黒主義のレッテルを貼ることに終始することによってことごとく「善か悪か」、

「敵か味方か」、「右か左か」という「結論」を急ぎたがるようになるものだ。正義だつてうわべだけのものもあるのに、それが誰それが言ったというと、にわかにはほんものの正義だと信じてしまう向きだつてあるのだ。もし「誰それ」が「絶対」なんて妄信してはばからない集団があるとしたら妄想集団としか言いようがない。

一方的に太陽崇拜に偏するのはまさにエゴ集団である。つねに己の「白」を主張し、悪事に追及がおよぶと「しらをきる」のである。しらじらしさを撒き散らす公害集団である。「白」の管理という太陽系は表向きは「白」を掲げているものの、腐敗の色である「黒」への転落はまぬがれない。

さて、月光仮面の白装束は「白」のシンボルを担っているが、けつして二者択一の強要をしていない。「月よりの使者」とうたい文句にあるように「白」を砦のように死守する人間界のエゴの亡者とはまったく違うのである。政治が糾弾されたたん、片棒かつぎの政治家たちが悪いのは自分ではなく、あたかも制度が悪いのだといわんばかりに潔白であると主張し始め、「政治改革」を一斉に唱えるに至つては「白」「白」と連呼しているようである。責任を問われている政治を棚上げしてしまつて、まるでかつての大政翼賛への大同団結ぶりの素早さを見るようだ。この頭隠して尻

隠さずの体たらくをうす気味わるく思ったのはわたし一人だけであらうか。

川内康範が『月光仮面』の作品の根底に据えたモットー「憎むな 殺すな 赦しましょう」は「白黒の決着」だけを主体にしていないのではない、そしてまた太陽崇拜的な覇権によって支配していくものでない。むしろ白黒主義に歯止めをかける寛容を、月光の優しさをもしくは「ゆらぎ」の存在を、ファジーの中の多様性を示唆していることがわかる。どちらかに加担することによって招来する混乱には共倒れを招くものだ。ともに生き延びるという姑息な延命の妥協もまた寛容とはほど遠いズレを生むことは言うまでもなく、いくら寛容が聡明な倫理であるといっても問題は多い。敵対者同士の自覚という土壌が同じでなければ「赦す」ということは成り立たない。「赦してやる」「赦してほしい」という横柄さと卑屈さだけの「赦す」になってしまふからである。非を非として認めない策略の中の寛容は到底なり立たない。

ここに何でもかんでも白黒をはっきりさせる太陽系崇拜の直線的な思考回路から紆余曲折の存在を認める、月の満ち欠けのように螺旋階段をゆるやかに昇るごとく己を顧み、さらに相手を思いやる「ゆとり」を示す新たな思考回路がある。これが「月よりの使者」という奥ゆかしさの消息である。「白」を懸命に主張してし

らばつくることが正義なのではない。それもただか相手が弱いとみると勢いや勢力の多寡に便乗して突っ走るとき、怪しい「白」にすがっている場合がほとんどではないか。自己証明を手抜きした早とちりの決着は、けっきょくは滞りのもととなる。

太陽は確かに明るい、看板が「白」かったり、明るいポーズをしているだけで、内実は周囲の人びとを暗澹とした思いにさせている場合が少なくないものだ。見た目の明るさや恰好だけの正義に忠実な姿は分裂病者よりも手に負えないしろものだ。糸井重里が作ったコピーに「世の中に暗くないヤツはいない。もし明るそうに見えるヤツがいるとしたら、そいつは回りを暗くしてる」(もっともこれはお金にはならなかったものらしいが)というのが、同感だ。ドストエフスキーを待つまでもなく、にせ紳士ほど縞模様ズボンに身をかため、金ピカの飾りもの(ブランド?)をまとうものだ。本当の紳士は身につけるものは簡素なはずである。人は人となるためにお金に執着するというのは当然の成り行きだが、それ自身が目的、旗印になってしまつて、貪欲が基盤になってしまつて「白黒の選択」に右往左往し、ぎすぎすした不調和を招いていくものだ。地位・名譽によってごり押ししたり、大立て者を介在させたり、何かと不純な媒介によって丸く収めるというジャパンの收拾に頼ることもまだまだ通用しているよ

うだが、いずれ時代遅れと笑われる日が来るはずだ。その手の手法は洗いきらい白黒の決着をつける必要があるだろう。何でも「ガラス張り」といったきれいごとを並べるひとがいるが、取りつくりなど一目瞭然であるとおもえば、別に裏舞台をすべて見たいとは思わない。納得できるか否かが問題なので、その思考回路を回避している勢力主義、ファッショ性が問われるべきなのだ。「ガラス張り」なんていうのは言葉尻をとらえるようなものに過ぎない。本質的ではない。ガラス張りにしたところで白黒主義がまかり通ったときには何と反発するのだろうか。権力の寝業師たちは手練手管をさも必然性に見せかけ、その後ろめたさを隠すためにとさら明るさを装うから周囲の人たちは暗くなり、滅入ってしまったのだ。過程より結論の趣である。趣がぎくしゃくしていれば、相手がいくらしてやったりと思っていようとも明るくなど振る舞ってはられない。「しらばつくれ」の横行をみすみす見逃すわけにはいかない。

月の出番はここにある。月は英知の発露である。太陽系の世界をまるごと映す鏡である。月は本来持っている人間の自然性を回復する直観であり、インスピレーションである。エゴの鉄塔のよみに出ずっぱりで「しらをきる」ことはない、出処進退の明快な空気のような存在。「月よりの使者」はきょうも待たれる。明るい

社会の嘘の光のインチキをばらすのは、「月よりの使者」が暗闇に「あんやく」する「黒」のにせ紳士を相手にしたときである。太陽系は表向きの世界、腹黒い彼らには裏こそ本舞台、魔性は不気味な夜更けに蠢動するのが相場。しかし、のさばる魔性の「黒覆面」どもは白い影におびえるざるをえない。にせの「白」、「白」利用者の「白」は白い「月よりの使者」の前に黒い馬脚を現すことになるからである。

「月よりの使者」は「黒白」選択を弁証法的にアウヘーベンした「イメージの使者」でもある。月のほうが王者・太陽世界がめざすべきイメージを示すキャステイングボードを握っている。無意識の中に潜在する存在として、束の間の正義に閃光のような命をかける月光仮面は仮の存在としていつでも懐かしい。それは闇の中に一瞬の光として刻印されて消えていくからだ。懐かしさを思い出した人に見える存在が「月よりの使者」である。さらに謙虚に「月よりの使者」の尊い任務に思いを馳せているひとには、分身としての舞台を与えられるにちがいない。あの瞬間の光を感じてきたひとのみにわかちあたえられる能力。それは観念ではない。からだに刻みこまれた懐かしさを感じる潜在的能力、遺伝子である。

覇者のような、この世をわがもの顔にする正義など、まさに思

い出したくもない、倦怠感を覚えさせられる、「月よりの使者」は縁遠い存在である。記号化した正義などとは無関係な、その都度、その都度の「月よりの使者」こそもつとも頼もしい存在である。もとより正しい正義があるとしたら、それは臆病者であり、はにかみ屋ではなかったか。

「月よりの使者」は風のメッセンジャー、速度の使者だ。使者は宇宙のメッセンジャーを伝えると、風のごとく去る、それが疾風はやてというものだ。使命を終えると、影も形もなく姿を消す。卑怯者には速度の欠落が特色だが、「月よりの使者」には速度が確かなものとしてある。オートバイに乗っているからではない。ここでは乗り物の機種など問題外だ。F1に加わっているベネトンのフラック・ダーニーはレーシング・ドライバーに二種あるとして「速い人と遅い人」とし、「速い人は、どんなマシンに乗っても速く、ここが大切なところだが、そのマシンを速くしていく。遅い人は、反対にどんな良いマシンに乗っても遅く、そのマシンの性能を食いつぶしてしまう」（「ミハエル・シュマツハ、ベネトンを語る」『NUMBER』一九九三年八月二十日号）と語っているとおり、遅いか速いかに注目したい。もちろん、速いのは月光仮面だ。功名が目当ての卑怯者たちは「何をやっても間に合わない」（宮沢賢治）から愚劣な引き延ばし策にやつきになりがちだ。「月よりの使者」

は颯爽たる速度・実現・革命自身が勝負なのだ。メッセンジャーには誰も触れることができないが、メッセンジャーはこの世のいたるところの人びとに触媒として働き、本来の正義を懐かしく思い出させ、正義らしさを取り戻す契機となる。たちまち「月よりの使者」は姿をひそめる。時に感じ、場面に應對する瞬時の出会いをのみ生きる、明滅の存在である。

明滅の淡き存在「月よりの使者」に幸いあれ！ 速度は革命の実現だ。実現性のなさを糊塗するのが先延しが得意な体制側の手練手管。いつも遅まきながら、というやつである。しかももったいぶったように「立派そう」に見せる。速きこと月光仮面のごとし、をお忘れなく！

〔付記〕この稿は一九九三年末、『月光仮面』をリバイバルしようかという兆のなかで書き上げたまま眠っていたものだが、一九九九年のワイドショーあたりにしきりと登場してきた月光仮面氏に敬意を示し、若干手を加え掲載することにした。正義こそ仮面の紳士のものであるべきだろう。正義の匿名性が消えて久しいのである。二〇〇〇年になって、しきりとNPO（非営利組織）が叫ばれる時代になったが、遅きに失したことは否めない。架空の月光仮面の登場をまつことなく、事もなき世が来ないものかと思

うばかりである。正義が営利営業になつてしまつたツケは容易に代償することはかなわないだろう。そんないつの間にかつゝつてしまつた山積する借金、弱いところ、子どもなどの弱者にはねかえつてゐることを無視するわけにいかない。その上で「正義」とは――。アハハハハ。

〔付録〕 伝聞・征義大将君

顔と言ふ物程不思議なものはない

見れば見る程不思議な存在である

在る様な無い様な不思議なる存在である

顔と言ふ程世の中に不思議なものはない。

古賀春江（「遊園地」中の言葉）

♪おみこし　ワツシヨ　せいせいどうどう　どうどうせいせい
セイギ　かんでつ　てつていこうせん　うでづく　ちからず
く
♪イワほれ　ほれカワ　ついでにハカほれ　ポケットほれ　せい
せいどうどう

ホレボレどうしで　ケツほれ　アナほれ　ここほれ　ワンワ
ン

♪あなかしこ　アナボル　ほるアナ　ぼつてぼつてぼりまくれ
おなじアナのむじな　アナバ　アダバナ　ひつかかれ
かнтаい　せつたい　だいかнтаい

♪おみこし　ワツシヨ　せいせいどうどう　どうどうせいせい
ほつてダメでも　ダメもとだ　セイギのおとおり　どうり
ヒツコメ

春ともなれば威勢のよい季節の節目の祭りばやし、がきこえたものです。なにはばかるものがあるかといった、むとんじやくな鳴りものいりのハメをはずす囃子が村中にひびいていました。そんな村の躍動する春の訪れから、たそがれる秋にかけてのお話です。その村は糞尿をたくみに商売にしてなかなかの丸儲けをして人呼んでマルクソ村といわれる村落でありました。

村の長はなかなか羽振りがいいところから表向きはいつしか征義大将君という異名で呼ばれていましたが、なかにはマルクソ、ときにはマルクスと称されていました。征義が表むき通じている

ということはおそらくほとんどのひとは最初の語義がすりかわって正義と思いがいしているらしいのです。事情を知っているひとの裏話では正義ではなく、くさいものにはフタのたぐいの、あくまでも正義なのだといったわっているからであります。つまり相手の正義を征服する正義という消息に由来するらしいのです。ひとに譲ることなく、ひとを許すことなく、ひとに謝ることなく、おのれの意地を貫徹する男への異名であるというのがもっぱらの噂であります。その風貌は口元にせせら笑いをうつすらときざむ、のつぺら坊の、とらえどころのないものだったということです。ひとのために心をくだくような、あじわいがどこにも感じられないように見えたという見方もされていたそうです。

なぜマルクスの異名があるのかはとんときいたことがありません。これは時代が新しくなってからつけられたのでしょうか。とかえひつかえ、今日言うところの効率・採算の論をふりかざして良策があるかの理屈っぽい口ぶりをふりかざしたからだという噂でありましたから、たぶん、そんな理由からそう言われたのでしょう。このお話のあとにすこしはあきらかになるかもしれせん。もつと異名はあります。人情のひとかけらもない、陰謀策謀の冷血な鉄面皮の鉄仮面、かならずみずからは手をくださす、手下をうごかして揚げ足取りばかり働くことからつけられたもののよ

うです。それからひとによつては狸のずるやすみ、となずけていたようです。つまり自分が同席しなければならぬ公務をいつも「ハヤシタテル」ような、いわゆる「ヨイショ」の名人たる代理にまかせて、陰であやつりながら自分の意のとおりにすすめようとするからであつたようです。この人まかせ、ズルぶりをかさねてひとびとは「狸寝入り」の異名をたぶらせているらしく、自分に不都合なことは人まかせ、様子が見えてくるまでは絶対に表にでていこうとしない魂胆をあてつけた命名のようなのであります。

そんなふうには直接にみずから乗りだすことなく、ひとの禪ふをで相撲をとる性質をだれひとり好ましく思っているものはありませんでしたが、理屈っぽく貫徹するしぶとさを勘違いしてそれを高く評価する取りまきがいるものですから狸おやじの存在価値があるというしだいであります。そんな買いかぶりをいいことにして、すつかり自分を過信し、増長してしまい、あげくのはては目的のために手段を選ばずがこの男の手口となつてしまいました。大方がもつとも迷惑したらしいことは、ひとの時間をじぶんの支配できる時間だと思いがいしているところにありました。いずれもにくにくしげに時間泥棒とも呼んでいました。すぐ決めることのできるはずなのに、右往左往するのがオチの代理ばかりおくりこんで、ひらかずともよい寄り合いをなんどもなんどもひらき、

とどのつまりは、自分におうかがいをたてさせて威光を保とうという仕組みになっており、かわりを持ったひとはいつもいつも仕切りなおしの徒労のため息。そんな時間の浪費は日常茶飯、はては迷路にはいったかとおもうと、なにを血迷ったのかおのれの非を棚にあげて、征義のおととりときたものです。あまつさえ正々堂々と寄り合いをпойコットしてふて寝をきめこむ始末でありました。

ダダツ子もいいところ、ひとの都合や感情や後先などいつさい考えたことのない、非道の手口をつらぬくというのがいつもの遣り口でありました。もちろん、じぶんでじぶんの首をしめる結末ながら、肝心なことは先送りしておかまいなしといった調子でしたから、バレるのに時間がかかり、責任を迫及する声なきこえようもないありさまでした。狸おやじにかかると、やたらよけいな寄り合いが開かれることになったので、くたびれ気味のひとびとは亡霊にでも出くわすのがこわいといった風情でありますから、とどのつまり、その首に鈴をつけるのはいつも手遅れになってしまい、あとの祭りというのが自然のなりゆきというわけであります。そんな計算高さをとやかく言うひともおりましたが、人はそしらぬげに鉄面皮をきめこんでいましたとき。

この狸おやじが牛耳るマルクソ村にはコソコソ秘密の寄り合い

をおこなう、あやしげな密室があちこちにあったようです。たまたまそこをとおりがかったひとたちは、耳になじまない、違和感をおぼえる妙なひびきをきいて、なにか奈落にでも引きこまれる心情にさせられたと語り伝えております。

♪ひそこそひそこそ　こそひそこそひそ　うだうだ　だうだう
くどくど　どくどく　うじうじ　じうじう　ひゅー　ひゅー
へいへい　ははあー

頻繁に使われる密室のありさまを語ってくれたひとによれば、そこにはかの有名なマルクスという人物の肖像などはなかったというのですが、マルクソ村の代表たる狸おやじの席には、どっかと特別しつらえの椅子が用意されていたそうです。一同がいかに知恵ありげにあの手この手の策を提案すると、聞いているのか聞いていないのかわからぬような、もったいぶった風情でふんふんと言っていた狸おやじがおもむろに口をひらいたものだそうです。手下からつぼをえた発言があると、「君、責任をとってやるな」といつも同じ口調で威圧していたそうです。もちろん、手下たちは姿勢をただしてうなずいたことは言うまでもありません。この様子を知っているものたちからは、そんな手下たちを

んがりの突貫小僧”とも“元の黙阿弥もみ消し小僧”とも蔑視していたようです。“元の黙阿弥”とは彼らがいくら頑張ってみたところで、そのなりゆきの見当は首尾よくいくはずはなく、どうせ振り出しにもどるということであり、それはただうごくためにならなく、やっているとみせかけて、迷惑ばかり産みだして、おのが責任をもみけしてあるくという、使命感の空転をわらって来たことによるコトワザのようであります。ひとつの路線をきめるとそればかりしかかんがえられず、相手があるなど一度もおもったことのない、短絡的な融通のきかない連中にたいする批評がこめられていたのでしょうか。

そんな路線貫徹の突貫小僧が村内をかけめぐったりすると、はたせるかな、そこちの密室から異様なひびきが耳をおそうのがつねであったということでした。

♪ああだこうだ こうだああだ こうでもない、ああでもない
つべこべあべこべ あべこべつべこべ ああせい こうせい

それはやがてキシミのような違和感をもよおす金属音に変わっていくのがつねであったそうです。

♪ああせい こうせい おれのめいれい しじょうめいれい
ぎすぎす すぎすぎ びしばし ばしびし そわそわ わそ
わそ

すると、きまつてその異様なひびきを伴奏にするかのごとく、眼をいからした頭のとがった突貫小僧たちがあちこち走りまわることになったそうです。

狸おやじは時間泥棒の異名をとるだけのことであって、無能ではあつても引きのばし陰謀策謀の手数だけはいくらだすものですから、それにつきあわされる村人や隣村のひとびとはいつもそれだけで消耗し、うんざりしたものだそうです。そうした時間泥棒のことをくだんのエコノミー論にひっかけて、エコノミーをかたる資格があるかを問う意味をこめて、不経済の元凶である狸おやじをマルクスとよんだというのがマルクスの出所の真相らしいのです。もちろん、クソでまる儲けした村の名称に掛けることは申すまでもありません。

さて、とんがり帽子の、カリカリ突貫小僧が登場することになりましたが、うひうひ、にんまり狸おやじの一の子分、二の子分、三の子分たちをさしているのです。一の子分は自分の名代たるおかざりのおっとり刀、実務は二の子分、三の子分がなっ

ていたようです。

二の子分は村の「とんがり突貫小僧」の代表選手。小さなからだに鬱くつをためこんできたといわんばかりにとんがり頭を爆発させる、口から先に生まれた見本どおりの吠えまくりの名人。とんがりコーンが瞬間湯沸かしのごとく湯気をたてて吹き出すのがいつものことでありました。かみつき、吠えまくるから、あいての話など大きくよゆうなどあるわけがなかったそうです。吠えるのがじぶんの責任の遂行だと錯覚しているらしく、声ばかり興奮してくるのでした。あいてがたは吠えまくり男の興奮の間隙をぬってかろうじて話がつうじたらしいとおもったりするものなら、この男は別れぎわにかならず口ぐせのように「ヤクソクゲンマン」といったそうです。ひとびとはあとでヤケソクゲンナマと顔を見合わせたものだそうですが――。吠えまくり名人の風貌はというと、眼は笑っているのだけれども、口はいつも狐よろしくとんがっていたそうです。

そんなとき、すかさず間髪おかずに否とか、げげんな素振りをしめさなかったら、「ヤクソクゲンマン」の思うつぼでじぶんはひと仕事を終えたとおもっているものですか、この突貫小僧への注文などはまったくつたわらないことになりました。けつきよく、吠えまくり男の注文相撲となり、曲解、お節介の得手勝手の手前

味噌の「正義」がいつちようあがりというのがもつぱらの噂でありました。

この男のあだ名は耳なし犬。聞いて聞かぬふりどころか、聞く耳がないという評判によるのでした。もちろん、肝心な犬の特権である分別の鼻がいつこうに利かないことを差し引いたうえで耳なし犬というあだ名なのだそうです。肝心の鼻が役たたずでは征義で勝負するしかありません。それでいて、相手の話には耳をかたむけているようにみえるしぐさをしきりにしたものだといふのです。そこは飼犬の哀しさか、おさとを隠すことにはならなかったようです。鼻に自信がないものだから気配りをしたポーズで点数をかせごうという魂胆もあったのでしょうか。もつとも狸大将の言い分だけは百パーセント聞くというので別名、鵜呑みともささやかれておりましたけれども――。それについては「鼻欠け」の犬としては仕方あるまいというのが世間の寛容な見方のようでした。

いやいや、まだまだあだ名はあったということです。耳なし犬には「鵜呑み」と似たもうひとつのあだ名がありました。相槌あいづち野郎というものです。野郎などという蔑視のことばが出てくる背景には煮え湯をのまされたひとの心情がたくされていられるらしいといふことであります。相槌とは狸おやじに対してはもちろんのこと

ですが、敵の目前でも「ユビキリゲンマン」などとさも親しそうに接近策をもちいて、ものわかりよさを売り物にして、いつのまにかひとをワナにはめる術策ぶりをさしているらしいのです。こちらの注文をくんでくれたかな、と思ったりしようものなら、あとでそんなこと言ったことも聞いたこともないという取りつくしもない、寝業ぶりでシラをきったということです。眼に浮かぶ笑みととんがり口ばしの矛盾の秘密は彼のあだ名の多面性に隠されていたようです。

*

こんな出来事があつたそうです。だいたい、公式の寄り合いには狸おやじがそっぽをむいて万事を家来まかせにしたりすることからおこることなので、もちろん、その責は狸おやじにあることはいまでもないので、哀しいかな、家来も似たもの家来で、鵜呑み、相槌しか能がないのだから仕方ないでしょうね。出来事というのは、突貫小僧らに非公式の寄り合いばかり開かせて、書記官に記録をさせず、あとでこっそりと書記官に議事録をおこさせ、さもおのれたちに利のある筋書きを公然たる記録であるかの「証拠」にすり替えたことがあつたそうです。人を化かす狸の本領ということになりますかね。

そんな姑息な綱渡りを狸おやじはやってのけたりする、コソク

さが千両役者にでもみえるとみえて、そんな手合いにも私設応援団がいるらしく、気脈を通じている連中がごそごそうごめいていたということであります。闇につうじているものにつうじれば、闇取り引きの棚ボタにありつけるとでもいうのでしょうか。

そのお先棒かつぎの先導役になつていたのが申すまでなく耳なし犬というわけであります。耳なし犬は狸おやじに敵の言質をみやげに出来させすればいいという臆病者の小者だから、「ユビキリゲンマン」の謎のふる舞いをおして相手を油断させ、右のものを左と置き換えることぐらい朝飯まえという算段のようでありました。こういうしだいでありますから、「突貫小僧」の「ユビキリゲンマン」と狸おやじの狸寝入りは征義を實行するためにワンセットになつていふというのがもつぱらの世評でありました。

もう一人のご忠臣男は他の子分衆のそばに重厚そうにかまえている男で、その胃痛になやんでいるかの憂い顔は一見、哲学者風に見えたものですが、いつも頑固に、賢そうに狸おやじや耳なし犬の発言をみとめる、首ふり人形よろしく、うなずいてばかりいるのが持ちあじでありました。そんなかたくな姿勢はひと呼んで鉄学者、頑固鉄というものでありました。相槌ぶりにかんしては耳なし犬を上回るといふもつぱらの評判で、耳なし犬のように吠えないぶん、賢そうに見えたので、哲学者にかけて鉄学

者と呼ばれたらしいのであります。温厚そうな風貌に暗いずる賢さをひそめている顔つきは隠しようもなかったということであります。

そんな頑迷な男でも融通がきくというか、内緒の話を表沙汰するの裏ワザの特技、ありもしなかったことを相手方の発言であるかのようにでっちあげ、しばらくの時間かせぎに乗りだすことがありました。ひとはみかけによらないというのはこの男のためにあるようなものでしたが、非公式の発言を議事録にして、ないものをあつたと言いはる詐欺師まがいの狸おやじの遣り口からすれば、似たもの同士であり、類は類を呼ぶ、狸に交われれば狸になるというコトワザがぴったりというわけで、経済学の帳尻は一文たりとも狂いはないのであります。へ理屈をかさね、屋上に屋を載せて時間かせぎをする時間泥棒の狸おやじの子分らしい、時間を先に延ばしていく経済原理がここにはたらいしているというのであります。なるほど、そう言われれば相手についている不服の利子など計算外というしだいで、こんな根気のいる時間かせぎをしてまでなにを貫きとおしたいのか見えてこないのですが、これにつきあわされたひとたちは、いよいよあきれ顔になったものさうです。

しかし、この手下たちの時間泥棒のかずかずは物語からほとん

ど省略されていることがわかります。悪口雑言ばかりつたわつていて、面白味のある話がすこしものこっていないのがなよりの証拠であるからです。語るのもはらだたしいというのでしょうか。

*

さて、話はかわりますが、狸大将や耳なし犬や鉄学者の毀誉褒貶へんは盛りだくさんでありますけれども、まともに語りつがれている話はこれからおつたえする物語ぐらいのようです。あるとき、隣村にもかかわる、お役人を一人招くけんで、両村が寄り合いをひらくことになりました。隣村が主導権を持っている約束事になつていのですが、狸村の解釈では隣村と理解がちがつていたということを経にじぶんたちの主導であることをすすめていたので、だいぶときがたつてからもその解釈を一度たりともわびたこともなければ、ましてや間違っていたと釈明などすることなく、その妥当性をもとめる寄り合いの請求ばかりしたということになります。おのれの非に加担する手続きを相手に求めるとおなじです。ですから相手にはしないのは当然でありましたが、それをなにかなんでも強硬突破しようという魂胆だけがありありという始末でした。バリケード破りのような手口であります。

そんな虫のいい手前勝手がまかりとおる背景のなかで狸村の時間泥棒ぶりに一方的に迷惑したのは隣村でした。ましてや聴き耳

の異名をとる聴き上手の、おっとり刀の隣村の長が相手では狸おやじや耳なし犬や鉄学者に手もなくあしらわれて敵の思うつぽになるだろうとささやかれたりもしたものです。時間泥棒をあいてにするにはつよかつぱねるにかぎるというのですが、やさしくあいての土俵にのっているうちに、敵のおもがままにあいての想定する「正義」つまり「征義」がまかりとおるといいうわけでしたから――。

聴き耳が何度がひらいた寄り合いには狸のずる休みはついに一度たりとも出てきませんでした。もちろん、一の子分、二の子分、三の子分、四の子分を繰り返しているわけですから、寄り合いはむだ骨にみえるようなまでふくめると、やたらめったらひらかれているのです。ここまで頻繁に繰り返せば、狸おやじの出番がどこにあるのか、かいかもわからなくなるのも仕方ありませんよね。まさに骨折り損のくたびれもうけ、というものであります。

聴き耳は鷹揚おとうようにかまえて、あいてがたのペースで時間をあやつられたのではまず先延ばしにされて翻弄されるだけではじぶんのほうがかなわないと思つて、あるときから前向きに解決に乗りだそうとしました。そんな姿勢をしめしたとたん、狸おやじは、すかさずほぼ最終段階ともいえる非公式の寄り合いをダシにする

手に出てきました。もちろん、狸おやじはふて寝をきめこんでその寄り合いには出席などしていませんでした。そこに出席していた書記官の一人を抱き込んで話の一部始終を聞き出し、都合のよい部分だけを記録として公表する手段に出たというのであります。二の子分、三の子分が出席していたのですから、そんな回りくどいことをやらずともいいはずなのですが、証拠性を高める手段から公式性を出そうという狡猾な裏ワザを繰り返したわけであります。ふてぶてしい手口は坊主まる儲けなどはるかに超えた、糞と味噌をいっしょにしたマルクソ丸めてマンキンタン。この直後の隣村ではめずらしく異様なつぶやきがあたり一帯につむじ風よろしく吹いていたそうです。

トミソクソ、クソミソ、フンニョウなりあがりクソミソ タヌキおやじ

おちつきはらつて タヌキのてぬき

カホウハネテマテ タヌキのふてね

にんまり たんまり タヌキばやしのおまつりだ

シタツツミ ハラツツミ ツツミカクサズおまつりだ

さて、脱線しましたが、肝心な寄り合いの場面にもどりましょ

う。ここにも狸おやじはふて寝を決めこんでおりました。ここま
で時間を浪費して応じなければ不服のかたまりとなつてふて寝を
しているとみるしかないというのが大方の見方であつたからであ
ります。「突貫小僧」の耳なし犬の開口いちばんの「記録しないこ
とにしましょう」という発言で非公式を了解事項として始まった
のであります。それをあえて掟やぶりするのですから、この発言
じしんも戦略なのだといつとびとはつぶやいたさうです。

もちろん、隣村の聴き耳の側近たちは狸村の発言にひとつつひと
つに裏があることをひやくも承知しておりますから、この寄り合
いではのつけから一様にいきまいたものでした。

「おたくの大将は人の位、格というものを無視して、相当、自分
がえらいと思つていゝのではないかね。あんたたちはお使いさん
でしょう？ 日和見、高見の見物では結局、まとまるものもまと
まらないよ。狸寝入りからは生産はありませんよ。こちらのスキ
を見つけるしか能のない諸君がいくらがん首そろえてもむだだと
おもいますがね」

そんな凶星を聞いていた耳なし犬はこのときとばかり肩をいか
らせて、こうぜんと言いはなつたものでした。

「何度も言つてきておりますように、われわれは窓口としてまか
されているのです。代理として委任されているのです。すべてわ

れわれをとおしてやつていただきたい」

「それはいづれ代理戦争になつてしまいますよ。責任を二重、三
重にしておくのではいづれ空転のものになりますよ。君たちは無
責任で尻ぬぐいもせずにはおかむりをきめこむんでしよう。それ
にしてもおたくの大将は自分がキレイゴトばかり考へているから
いつも肝心なことから逃げていゝ。責任を取るのがこわいだけの
意気地なしさ。それでいて画策だけはお手のもので、記録にない
ものを記録だと言ひ張つて世間にとおると錯覚してござる。そこ
までして天下が欲しいのですかね。おたくのおやぶんが征義大将
君と呼ばれていゝのはご存じでないわけではないでしょうね」と
いやみを言うものもありました。

しかし、都合のわるいことは右の耳から左の耳に抜けていく連
中ぞろいだから、論理はむだな抵抗。不都合なことは話題までが
耳をも走り抜ける「突貫小僧」と化すというしだいでありませう。
しばらくの時間かせぎ、物理学や法律的にいつても検証して暴
露されるまでは、この遣り口がバレるのにしばしの安泰というこ
とになつていゝからであります。

「いや、目的を貫徹する点では代理といつてもわれわれは大将は
同等といつてよいのであります」と鉄学者はそのとんがり頭をと
んがらせ、小柄なからだを目いっぱい背伸びさせて、おもむろに

うそぶいたということですよ。

「時間も迫っていることですから、われわれの意中の人物を認めていただきたい」とすかさず切りこむ耳なし犬。

回を重ねた非公式の寄り合いが量から質に転換したかの口振りでありませぬ。哀願すら居丈高になっていたということでもあります。盗人ただけじゃない、とはよく言ったものです。

「時間とはよく言えたものだね。君らの時計は止まったままかも知れないが、徒勞を強いられるわれわれには時計は破綻して、買い換えをしたばかりだよ。むだな寄り合いはひらかずもがなな寄り合い。最初からボタンのかけちがいを引きおこしているのをふりかえつたらいかですか。ひとをさんざんふりまわしておいて、ひとの時間までだいなしにしているのはダメイたちではないか」と二人の小者役人を指差してのしるものでました。

もはや隣村のいちどは堪忍袋の緒を切らさんばかりであったのです。なかには絶句して、顔を見合っているものもいたそうです。

「そうだ、君たちの罪は重いぞ。大将を無傷にして温存して、なにかたくらもうという算段だな。それとも君たちはその村の役職にすぎりついていたがために道理を引っこめてまで執着したいとでいうのかね。大将も大将だが、部下も部下だね。おたくの大

将も口先だけの根性なしを手下にかかえてひとを見る目がないね。まかせちゃならないものに代理だの、委任だのと言いたいほうだいきせている。とんがり頭の突貫をそのかしておいて、おのれは狸寝入り、洞ヶ峠ときたもんだ」と隣村の重鎮の一人がきびしく断言しました。

「君たちは窓口をまかさされたといいながら、こちらに追及されると、すぐ持ちかえって相談するありさま。能なしのごくつぶし。大将におうかがいをたてなければすすまない寄り合いなら、君らはとつととうせなさい」と再び重鎮がダメを押ししました。

「おい、口を慎め」と耳なし犬。

「口を慎む理屈がないや。そのとんがり口ばしこそ封じたらどうかね。むだ飯食っているやつはなにやってもぐずだ。口だけ達者でもその口は時間を食うだけじゃないか。経済の論理からもっとも遠いとなみだということをとくとおもいしらせてやる。絶対に否だね。イナ」と重鎮は聴き耳がおだやかにさとしたりする先手を打ってべらんめい調でどやしつけました。

「代理人を侮辱するのはおらが大将をなめたことになりませよ」とめざらしく手柄話でもみやげに持って帰ろうとでも意気こんでいるのか、鉄学者が重い口をひらきました。

「よくぞそんな口がきけますな。大将がお膳立ての寄り合いに

乗ってこず、君らでは格違いだと言ったことを覚えていますよね。それをもう一度、君たちに返しておく。君らの正当性や正義はへり屈、嘘でかためた「えせ正義」。衣をかぶった正義。つまりはこちらを出し抜こうとする正義だね。言ってやろうか、いずこでもそんな狸おやじやその息のかかった小役人が幅をきかせている狸村をこの世の七不思議にかぞえているんだぜ。先人はよくぞ正義大将君となずけてくれたものさ」と隣村のいちばん隅に席をとっていた男がいちどうを代弁しました。

三白眼をつりあげて耳なし犬が口をひらき、薄笑いを隠して最後の遠吠えをしたそうでありました。

「勝手にしろ、ということですか」

「その言葉を蠟で封じこめておきましょう」と聴き耳はあいた口がふさがらないといった面持ちで言いはなちました。

そのとき、隣村の書記官は思わず聴き耳にむかって聞きました。

「これは記録にしてもよいでしょうか？」

「その必要はない。記録しない約束なのだから」といい、聴き耳はこれ弁明にとめる二人の男をねめつけて、隣村のいちどうをその場から引きあげさせたそうでありました。

席をけって出たあとも、「カチカチ山の狸に火がついた。泥船をあやつる愚鈍のやからめ。沈没しても懲りない面々だな」と隣村

の役員たちはほとほとあきれたとばかりにケリをつける言葉にと欠いたということでした。

隣村のひとびとは相手は吠え面をかいて、尻尾を巻いて逃げ帰ったとみていましたが、風の便りでは二人のとんがり突貫小僧は敵陣に乗り込んで鬼の首を取ったといわんばかりの「凱旋」を誇ったということでありました。

「報告いたします。大将の知謀のおかげをもちまして人選はわが村に委ねられました」

この直後、狸村のおふれには公然と、新役人の人事が誰某に決定したと公表されたのでした。しばらくの間、狸のしっぽを誰一人踏むものも、引っぱるものもなく、きわめて安泰につつまれてなにごともしなかつたそうでありました。

しかし、しばらくの時間をかせいだあとの狸村はというと、つかのまの権利獲得の奔走劇の幕間であつたらしく、巷にはまたしても地底をほうような、不穏なひびきがしていたそうです。

うはうは はうはう ぼろくそ くそぼろ

セイギ ギセイ セイギ ギセイ

そんな奇妙きてれつな音色を薄気味がわるいといって村内を出

歩く人もまばらになつたほどだそうであります。そしてひとびとの背中を見ると、セイギ、ギセイ、セイギ、セイギ、ギセイというものがないひずみでゆさゆさ揺れていたとも伝わっております。そのうち敏感な子どもたちのあいだにこんな童謡わらうたが流行つたそうです。

♪おやおや やおやお おたおた たおたお
やおちよう はったり すりかえだ

タンタンタヌキのキンメダル よくよくみればキンメッキ
メッキがばれて ザンゲした

♪あやふや ふやあや あやふや ふやあや

ごりおし むりおし おしりぺんぺんタヌキのたいしょう
ハラツツミぼんぼりん つみなオトがする ムリをとおせ
ばおらがてんか てんか せきにんてんか あとはのとなれ
やまとなれ

♪うやむや むやうや うやむや むやうや
けらいごりおし みなむりおし おしりふかないとんがりこ
ぞう

とんがりとおせばどうりひっこむ つみなオトがする セイギをかくしてとんがる とんがる

ついでにベロだし とんずらだ そこはまつくらトンネルだ

さんざん恥をさらしていたはずの狸おやじめは悔い改めたかとおもいきや、更生したとはついに聞かず、その村は過疎になり、人っこ一人住まない「グソ食らえ村」と呼ばれるようになったそうです。

♪チャカポコ チャカポコ ナンマイダ ナンマイダ ジゴク
ノサタモカネシダイ ヒヤクマンダ センマンダ ナンマン
ダ

シヨギヨウムジョウ アアムジョウ ウソツキオトコ ドン
マイダ ドンカンダ

モトノモクアミ モトノモクアミ ドウドウメグリ ダメモ
トダ アトガナイ アトモドリ フリダシダ

アツタカナ ナカツタカナ アツテモナクテモ ドウデモイ
イ ヒトヲノロワバアナフタツ ボケツ バケツ カラケツ

アアケツタイ
アトノマツリダ マツリノアトダ シタツツミデベロカンダ

♪チャカポコ　チャカポコ　ナンマイダ　オダブツダ

そしてこの村からは音沙汰とてなく、ひととて訪れることのない「音なし村」になってしまったとき。

〔付録の付記〕 月光仮面を通して正義論を展開したはるか以前、つまり二十代の終わりから三十代の初めに書いた詩をまとめて『黙契』という詩集を刊行したことがあります。そのときに取り置きした何編かの反故があったのを思い出し、正義論の付録として収録することにしました。世の中には何度か符合する出来事めぐり会うことがあるらしく、それを思うと不思議な感にたえません。